

愛知大学 語学教育研究室 第 10 回公開講演会 開催報告

『オノマトペが伝えるもの』

▼ 日時：2024 年 10 月 19 日(土)

14：00～16：00

▼ 会場：愛知大学豊橋キャンパス

2 号館 241 教室

【Web】 ZOOM



▼ 講師：秋田 喜美氏 (名古屋大学 准教授)

第 10 回の公開講演会は、豊橋語学教育研究室が担当し、名古屋大学の秋田喜美氏を迎えて、『オノマトペが伝えるもの』と題する講演を、241 教室並びに Web 上で開催した。講演は二部構成で、前半ではオノマトペがアイコン性により多感覚性を具体的に伝えるものであること、後半ではそのアイコン性が言語の基本的性質であり、その起源に関与した可能性があることが示された。

講演前半では、**ideophone** (表意音) ともいえるオノマトペについて、日本語を中心とした豊富な用例、実証的実験により、その多感覚性、多義性が示されたが、会場および Web からは、方言の問題、実験における言い方のコントロールの問題、オノマトペの可愛さ、表記の問題 (ひらがな・カタカナ)、多義性における歴史性の問題 (擬音→擬態)、個別言語の音体系の問題、外国人がどのように日本語のオノマトペをとらえるのかなど、活発な質問がなされた。

後半のオノマトペのアイコン性についての講演は、猫の名前当てクイズから始まったが、これは言語がアイコン性からシンボル性へと移行する理由 (コミュニケーションにおける優位性) を示すものとして見事に回収されることとなった。氏の、20 世紀の言語学がソシュールの言語の恣意性の観点からオノマトペを一般語の下に置いていたのに対し、アイコン性は言語のすべてのレベルに見られるものであり、実はオノマトペは言語の中心的なものなのではあるまいかという持論は説得的であ

った。氏はまた、こうした進化（インデックス→アイコン→シンボル）は、幼児の言語習得にも見られ、言語の起源も同様に説明できるものとした。

これに対して、会場および **Web** からは、再び、言語間で異なる問題（個別言語の音体系）、遊技的なものとの結びつき、オノマトペの持つ親密さ、実験における聴覚と視覚との干渉の問題、さらには、祖語にまでさかのぼると再び恣意性の問題が浮上するのではといったものまで、さまざまな質問がなされた。

当日は、会場と **Web** とを合わせ 31 名ほどの参加があった。言語学の最先端に触れる高度な講演であったのにもかかわらず、学生、教員のみならず一般の参加者にも興味を持っていただける充実した講演会を持つことができたのはひとえに秋田氏の力量に負うところが大きい。新たためて感謝する次第である。

（文責 中尾充良）

**下記ページで
講演を聴講した方々の
感想などを
紹介しています**

第10回 愛知大学語学教育研究室 公開講演会 参加者アンケート結果

①参加形態

会場	18
オンライン	13
合計	31

②講演会を知った方法

チラシ・ポスター	8
知人の紹介	8
本学HP	7
その他	3

③参加回数

初めて	18
二回目	0
三回目以上	7
覚えていない	1

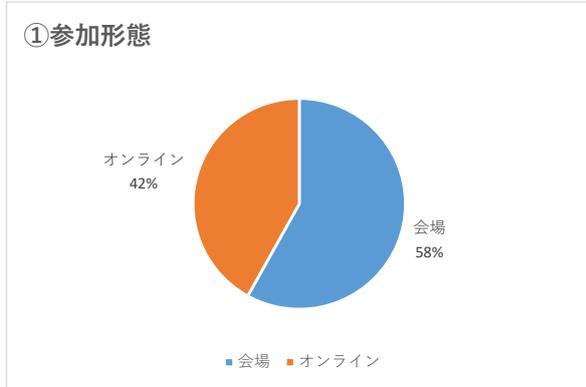
④参加理由

テーマ	17
講師	11
語学教育	5
知人の勧誘	3
その他	5

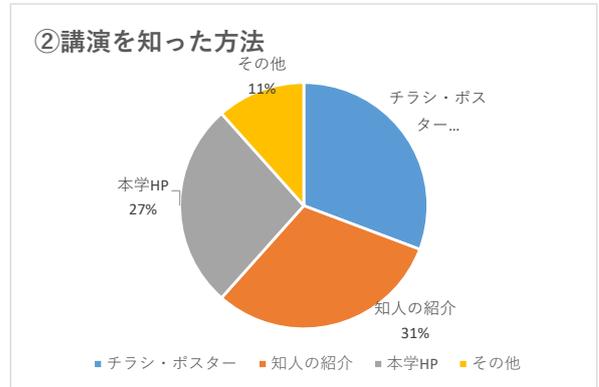
⑤講演難易度

易しい	0
やや易しい	1
ちょうどよい	15
やや難しい	8
難しい	0

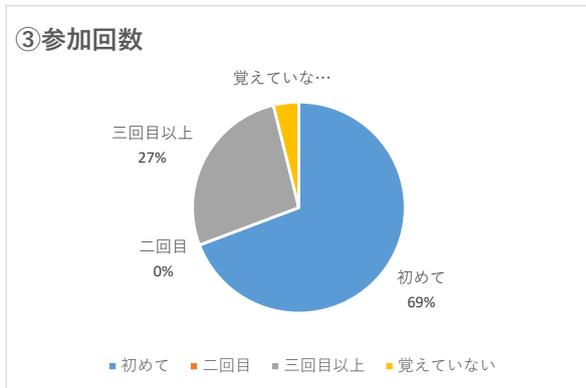
①参加形態



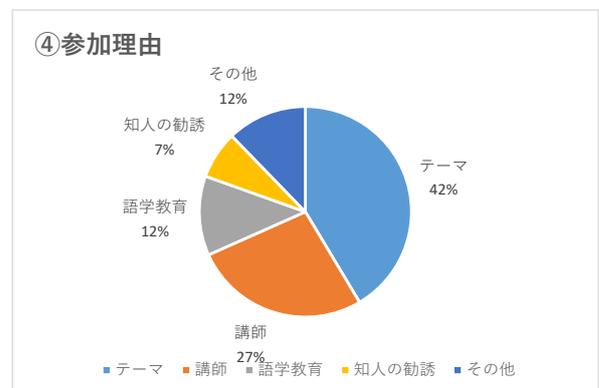
②講演を知った方法



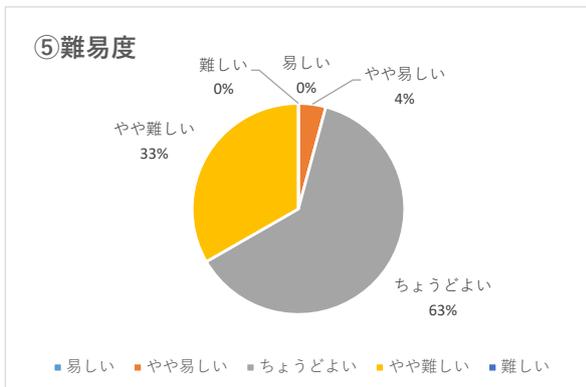
③参加回数



④参加理由



⑤難易度



聴講者の声(一部抜粋)

- ▼ご自身のご研究をわかりやすく、クイズなどを交えて楽しくお話しいただけた点が印象に残りました。言語起源説について、もう少し時間があれば、じっくりお聞きしたかったです。
- ▼多義性やアイコン性の話など、これまでオノマトペを深く考えずに使っていたのでとても面白かったです。
- ▼オノマトペについて非常に興味深く、大変分かりやすい講演で満喫させていただきました。今まで曖昧だった言語学の用語や概念も整理でき、とても勉強になりました。
- ▼オノマトペの多感覚性、具体性、アイコン性などについて、面白い学びでした。言語の深みは果てしなく広く、また、このように、一般にも公開講演会を広げていただきたいです。
- ▼事前に言語の本質を読んで予習していたので、非常に勉強になりました。
- ▼私はコーラスを教えています。いつも、発声練習でオノマトペ入りのやさしい曲を選んでいきます。(中略)オノマトペ入り曲から入ると皆さん(参加者)明るい声と大きな発声になるので不思議ですよ。ドレミファソラシドと発声するよりも軽い気持ちで歌ってくれるのですよ。オノマトペにすると歌詞が認知されて歌い易いのですかね。(中略)参加して良かったです。
- ▼誘われて参加しました。業種がシステムエンジニアなので、0or1の世界で仕事しているため、言語の表現や曖昧さなど考える機会がなかったので、大変新鮮でした。人とのコミュニケーションに活用できるのではと感じました。オノマトペが世の中からなくなったらどうなるのか？と考えたときに、堅苦しくなり互いに理解が進まず喧嘩、争いが増えるのではないかと感じました。効果的にコミュニケーションを取る手段として重要なものと感じました。
- ▼一般で参加させて頂きましたが、とってもわかりやすく、オノマトペって奥が深い言葉なんだなって思いました。又、大学生や教授(先生)と一緒に講演を聞く機会も新鮮でおもしろいなと思いました。
- ▼先生は謙遜して眠くなると仰っていましたが、とても面白いお話でしたのでそんなに謙遜しなくてもいいのにと思いました。時間が足りず、スライドを後半に飛ばしたので残念でした。
- ▼秋田先生は素晴らしいです。日本語は勉強中ですから、まだ全部分かりませんが、このテーマは面白いと思います。オノマトペは難しいです。(日本語学習者には特に難です。) But there's a lot to learn about it, because Japanese idiophones/mimetics are so rich and vast.
- ▼(前半)オノマトペの意味を研究者の方々は「他感的かつ具体的に状況を説明するもの」といった様に定義していると解釈したが、それに対し(医療現場では)オノマトペを漠然とした表現としているのは、オノマトペ同士の棲み分けが強だけでなく、そのオノマトペを使用する人も棲み分けて(=超地域的)いるからかな、などと考えた。まるでオノマトペが人を選んでいる

みたいだし、オノマトペで仲間か判断することもできそうで、「山！」「川！」などの合言葉や合図の起源でもありそうだったと思った。

(後半)アイコン的なオノマトペは子音の性質がよく表れていて、聞きたくなる魅力があると思っていたが、そこからシンボルの中でも抽象的な概念を表す文字が各地域で組み合わせて出来あがる過程で、文法や方言のように個集団で言語が出来あがっていて、現在に至るのかな、と考えた。言語ごとに見せる世界が違うサピア・ウォーフの仮説はもちろんだが、オノマトペが与える感覚が聞く人を選んでいて、仲間を見分けるツールだったとしたら、多言語のオノマトペに強烈な違和感が湧く理由になるのかも、と想像した。オノマトペが言語の違いの始まりなのかもしれない。

▼オノマトペが多義的だという話がおもしろかった。

いろいろな要素がオノマトペに含まれていてすごい。(あんなに簡単そうなのに)

▼自身の子育てや初めて言葉を教えるときにオノマトペを大いに利用していましたが、正しい言葉使いにどう影響していくか疑問でした。

▼オノマトペ以外のアイコン性をもつ表現がよく分かった。

▼秋田先生の人柄が素晴らしかった。

2024.10.29.

豊橋語学教育研究室